

仏英基本語彙対照覚え書き (I)

松 田 孝 江

はじめに

外国語を学ぶことは、それがどんな言葉であれ、表現の中に盛り込まれた基本語彙を覚え、増やすことから始まる。ところでフランス語の初級クラスで観察していると、学習者は語彙を増やすにあたり、英語の知識を総動員してフランス語に対処しようとする。それはある程度有効に働く。しかしながら時として、確かに語源は同じであるものの、思いがけない意味の差ができてしまっていることもある。ここではそうした類縁関係にあると思われる単語をいくつか取りあげて、フランス語と英語の交流史の一端をたどってみることにする。

I. フランス語と英語——誕生と発展——

具体的な単語の検討に入る前に、フランス語と英語について、その揺籃期から始まる二つのことばの接点と、それぞれの基本語彙が統計的にどの程度の影響関係にあるかを概観しておこう。

フランス語先史は、ガリアの地にラテン語をもたらしたローマの植民活動から始まる。ローマ人は前120年頃に南フランスからガリアの地に侵入し、前51年までに、カエサルは先住ケルト人を制してガリア全土を征服した。ガリアの地に根をおろしたラテン語はガロ＝ロマン語と呼ばれるが、ガロ＝ロマン語の時代は、5世紀のゲルマン民族の大移動によって終わりを告げる。なかでも5世紀後半にガリア北部に建国したフランク族は、その部族名が示すとおり、proto-français ともいうべき原フランス語の担い手となった。彼らは母語を捨て、被征服民のことばを採用したのである。フランス語にみられるゲルマン系借用語のもっとも古いものは、フランク族のことばから借用された。軍事用語の多くがゲルマン語起源であることは広く知られている。

ところでフランク族をふくむゲルマン民族のことばであるゲルマン語について、どのような分類がなされているかみておこう。ゲルマン語は地理的分布として東ゲルマン語、北ゲルマン語、西ゲルマン語に大別される。まず東ゲルマン語であるが、ゴート語に代表される東ゲルマン語には、現代まで生き残っているものはない。つぎに北ゲルマン語について、これは総称的にノルド語（北方語の意）と呼ばれ、非インド・ヨーロッパ系とされるフィンランド語を除く、北欧諸国のことばで、アイスランド語、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語がこれに当たる。西ゲルマン語は、ユトランド半島のデンマーク語地域を除く大陸のゲルマン語圏に、ブリテン島を合わせた地域で話されるゲルマン語である。そしてこの西ゲルマン語は、高地ドイツ語と低地ドイツ語に二分される。高地ドイツ語は今日の標準ドイツ語の基礎となった。低地ドイツ語としては英語の他に、現在もオランダと北ドイツの一部にみられ、系統的には英語にもっとも近いとされるフリジア語、オランダ語、ベルギーで話されているオランダ語すなわちフランドル語（＝フラマン語）、北ドイツ地域で話される狭義の低地ドイツ語がある。フランス語史では、フランク族の話したゲルマン語

をフランク語と呼ぶことがあるが、ゲルマン語の系統分類に“フランク語”を用いることは少ない。上記でフランク語の子孫をあげるならば、地理的状況からみて、西ゲルマン語における、標準ドイツ語、オランダ語、フランドル語などであろうか。(1)

つぎに、英語からみたフランス語およびその祖語であるラテン語との接点はどこにあるのだろうか。英語の中のラテン系借用語は、英語そのものの始まりよりも古く、祖語である西ゲルマン語の中に取り入れられたラテン語である。英語の歴史も、他のゲルマン語からの分離独立という意味では、フランス語同様、ゲルマン民族の大移動から始まる。現在のドイツ北東部からユトランド半島にかけて住んでいたアングロサクソン人がブリテン島に渡り、先住民のケルト人を駆逐して定住したのは5世紀半ばのことであった。しかし文献としての記録は7世紀末を待たなければならない。有名な *Beowulf* の写本は8世紀初頭のものとされる。文献時代に入ってから英語の危機は、ノルマン朝(1066年～1154年)の成立によってもたらされた。イギリスに侵入したノルマン人は、北ゲルマン語地域からやってきたヴァイキングの子孫であったが、北フランスに定住して以来完全にフランス化して、フランス北部のノルマン方言を話し、これがイギリスに伝わった。ノルマン方言は、『聖アレクシ伝』(1050年頃)に代表される、きわめて豊かな文学を持ったことばであったが、イギリスに上陸した後に独自の性格を帯びるようになって、アングロノルマン語と呼ばれるようになる。一方大陸フランスでは、教会との連携のもとにカペー朝(987年—1328年)が栄え、言葉の上でも、イル＝ド＝フランス地方であるパリのフランス語が他の地方を抑えて勝利を収めるようになっていく。その影響はイギリス宮廷にも及び、ノルマン家の後を継いだアンジュー家のプランタジネット朝(1154年—1399年)治下の13世紀になると、アングロノルマン語に代って、しだいにパリ方言が好まれるようになる。

ところでドイツの言語学者マンフレード＝シェーラーは、10世紀から20世紀までの1000年間の英語における、フランス語からの借用語彙2000語の初出年を調査し、その結果をつぎのように報告している。(2)

1150年まで	0.3%	16世紀に	14.6%
1200年まで	0.6%	17世紀に	8.9%
13世紀に	13.6%	18世紀に	5.4%
14世紀に	31.8%	19世紀に	7.2%
15世紀に	15.7%	20世紀に	1.9%

英語の中のフランス語借用語は、ノルマン朝が滅びた後から増え始め、3割を占める14世紀を中心に、全体の76%が13世紀から16世紀に集中している。シェーラーの分析によれば、「ノルマン人が二か国語を使用できるようになったのは、12世紀後半になってからにすぎない。二か国語常用は、13世紀になって初めて、そして14世紀に更に一層、古くから定住しているノルマン人の社会の間で普及し、ついに彼らによっても英語が好まれるようになった。中期英語における1万以上のフランス語語彙の多数は、二か国語常用の期間と英語への転換期に使用された。」(2) フランス語が支配階級の言葉として確たる地位を占めている間は英語への影響は少なかった。百年戦争(1337年—1453年)を契機にフランスへの反感が高まり、英語がかつての地位を取り戻していく時期に、二つの言葉は混じり合ったのである。

基本語彙の面から、フランス語もしくは英語の中の、ゲルマン的またはラテン的要素をみてみよう。フランス語の基本単語に関するものとしては、1954年にフランス文部省が発表した、1374語か

(309)

らなる *Le Français Élémentaire* がある。この中でもっとも使用頻度の高い1000語について、語彙論者アンリ・ミッテランは、およそ35の単語がフランク語、より一般的にはゲルマン語起源であるとした上で、具体的につぎの単語をあげている。⁽³⁾

franc, trop, marcher, (re)garder, guerre, bout, gars, garçon, marquer, gagner, gare, anglais, tas, blanc, jardin, (dé)brouiller, début, colle, (ar)ranger, gêner, bord, bâtiment, bleu, riche, engager, danser, équipe, allemand, attraper, gauche, frapper, loge(r), taper.

上記の単語——接頭辞・接尾辞を考慮に入れなければ33語である——は、総数1000語の中のわずか3.5%でしかない。しかもこれらのいくつかには、ゲルマン起源を否定する説もないわけではない。たとえばギローによれば、garçon, tas はラテン系の言葉になるし、début, colle, gêner, gauche, danser の起源についても、ゲルマン系とは断定できないとする説もある。⁽⁴⁾ つぎにフランス語の動詞について、Gougenheimは下記のように、使用頻度の高い順に20の動詞をあげているが、それらはすべてラテン系であり、ゲルマン的要素は含まれていない。⁽⁵⁾

être, avoir, faire, dire, aller, voir, savoir, pouvoir, falloir, vouloir, venir, prendre, arriver, croire, mettre, passer, devoir, parler, trouver, donner.

上記の動詞のうち、arriver と passer は英語に借用されて今日に至っている。

それでは英語に入ったラテン系、特にフランス語の割合はどうか。シェーラーは、統計上頻度が高いとされる2000語について、『オックスフォード英語語源辞典』によって各語の語源を分類している。その割合は、ゲルマン語45%, フランス語35%, ラテン語8%, ラテン語あるいはフランス語に入るもの2%, その他のもの7%になるという。⁽⁶⁾ 動詞に限っていえば、グスタフ・キルヒナー著『イギリス英語およびアメリカ英語の10個の主要動詞』で扱われている動詞, be, come, do, get, give, go, have, make, put, take はすべてゲルマン語起源だという。⁽⁷⁾ 同じくシェーラーによれば、*The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles* (1956年)に収録されている不規則動詞は260語であるが、そこから複合語を除いた176動詞について調べた結果、フランス語からの借用語は catch, cost, pay, prove, spoil, strive の6語だけであったという。⁽⁷⁾ しかしながら、フランス語から動詞が借用される場合、英語に入ると規則動詞になるのが一般的で、不規則動詞中に紛れ込んだフランス語起源の動詞はむしろ例外的なものであろう。

以上の結果から英仏語を比較すると、フランス語1000語のうちの3.5%がゲルマン系であるのに対し、英語2000語のうちの38%がフランス語起源であり、ラテン語とフランス語を合わせると、その割合は48%に及ぶ。とはいえ英語でも、基礎になる少数の動詞には、フランス語起源のものは含まれていない。

II. travail と travel をめぐって

フランス語の travail と英語の travel を結びつけて考える人は少なくない。英語の travel はフランス語からの借用語であるが、一般的な意味をいえば、travel は“旅行”, travail は“仕事”と、両者は食い違っている。ここではフランス語 travail の歴史的背景をみながら、英語に借用された

事情を追ってみよう。

フランス語の travail の語源をたどると、メロヴィング朝治下6世紀の俗ラテン語 tripalium (tri “三本の”, palus “くい, 棒” からなる一種の拷問器具) に行きつく。この tripalium から俗ラテン語動詞 *tripaliare “tripalium でこらしめる” が生まれ、その流れを汲む動詞が travailler (初出1080年) “苦しめる” であるとされる。⁽⁸⁾ 時を置かずしてそこから名詞 travail が派生し、11～12世紀には“苦しみ, 努力”を意味した。travail d'enfant “産みの苦しみ, 陣痛” も、12世紀前半にすでにみられる。12世紀も末になると、“疲労, 骨折り”という、結果に重点を置いた意味も出てくる。さらにくだった14世紀には、“活動の成果, 成し遂げた仕事”という肯定的な語義になる。そしてこれが、17世紀に現われる“生業としての, 職業としての仕事”という意味につながっていく。

ところでこの言葉はいつ頃、どのような意味で英語に入ったのだろうか。もともと古英語には、“進む, 前進する; 旅行する”を意味する動詞として、現代ドイツ語の fahren と起源を共にする, faran (725年頃) > faren (1100年) があった。時代がくだって1275年頃に、フランス語の名詞 travail が、“つらい労働, 苦勞; 産みの苦しみ”という当時のフランス語そのままの意味で英語に借用された。同時に移入された動詞は、英語では travailler の語形をとり、“苦勞する, 骨を折る”を意味したが、1300年には“旅行する”という語義も確認されている。当時の旅行は艱難辛苦を伴うことが多かったために生じた意味だという。⁽⁹⁾ travailler はアクセントの移動に伴って travelen となり、さらに14世紀も後半になると travel と綴られるようになる。動詞とともに名詞についても、travel “旅”という語形と意味が定着する。このように、13世紀後半に確認できるフランス語からの借用語 travail, travailler は、14世紀には動詞, 名詞ともに travel となって、以後“旅”, “旅する”という語義を伝えるのであるが、当初の語形 travail も、「古語・文語」“苦しみ, 苦しむ”として、現代の英語辞典に収録されている。他方ゲルマン系の古英語 faren は、travel にその地位を奪われて廃れてしまい、現代英語では fare “旅費”や farewell “別れ, いとまごい”にその痕跡を留めるにすぎない。

中世の旅が命がけの“苦勞, 苦しみ”であったことは、イギリスであれフランスであれ事情は同じはずであるが、フランス語の travail が“旅”を意味したことはなかっただろうか。これについて *The Oxford English Dictionary* (1989年) の travail の項には、つぎのような記述が見られる。

「フランス語と英語は、意味変化について同じ道をたどらなかった。英語の方では、古英語が持っていた“仕事”という意味を発展させず、フランス語はフランス語で、アングロフランス語には早くからあり、英語で主たる意味となった“旅”という意味を発展させなかった。」

travail, travailler に“旅, 旅をする”という意味を見い出すべくフランス語の辞書を調べてみても、なかなか出てこない。9～15世紀のフランス語を集めたと銘打ってある Godefroy の中世語辞典から始めて、Huguet の16世紀辞典, 17世紀の Richelet, Furetière, アカデミーの辞典などを繙いてみても無駄である。Trésor de la Langue Française も同様であるが、Littré の辞典だけは、動詞 travailler の項をつぎのような説明で締めくくっている。

「travailler には voyager “旅行する”の意味があった。“苦勞, 疲労”につながる意味である。英語の travel “旅行する”が派生したのはこの語義からである。」

Gougenheim に見られるつぎの解説は、恐らく Littré を参照したものであろう。⁽¹⁰⁾

Une forme particulière de fatigue est la fatigue des voyages. De là le sens de “voyager” qu'on trouve chez Froissart: “Ils ne firent oncques en leur vie autre chose que travailler

de royaume en royaume.” Ce sens s'est conservé dans le verbe anglais *to travel* qui signifie “voyager”.

「疲労の特別な形が旅の疲れである。そこからフロワサルに見られる“旅をする”という意味が生まれた。：《彼らは生涯、国から国へ旅する以外のことはしなかった。》この意味は、英語の動詞 *travel* “旅行する”に受け継がれている。」

フロワサルは、ベルギーとの国境近くの町ヴァランシエンヌ Valenciennes に生まれ、英国宮廷にも迎えられた年代記作家として、1337年～1400年の生涯に、百年戦争初期の頃の貴重な記録を残した人物である。彼の年代記はピカルディー方言とみなされている。従って、少なくとも14世紀のピカルディー方言では、travailler が“旅行する”の意味を持っていたことになる。しかし Godefroy の辞典にもないところを見ると、“旅行する”という語義は北部方言に止まり、その後消えてしまったのであろう。

11世紀に始まる、フランス語の travail, travailler “苦しみ、苦しめる”が、時代がくだるにつれて肯定的、積極的な意味になり、すでに14世紀には、“仕事、仕事をする”となったことは先に述べた。ところでこの意味変化には、もう一つの要素が関係しているようである。

古代フランス語には、“働く”を意味する動詞として、俗ラテン語の流れを汲む *ovrer* (1121年) > *ouvrer* があった。しかしこの動詞の持つ、一般的な“働く”という意味は徐々に衰退して、17世紀になるとその地位を travailler に譲り渡した。なぜか。ouvrer にとって不運なことは、現在時制の活用形が ouvrir “開く”と同じ綴りになってしまうことであった。混乱は動詞ばかりか形容詞にまで及ぶ。現代語の un jour ouvrable “働いてもよい日”を、多くの人は“店を開けてもよい日”だと思っている。⁽¹¹⁾ こうした取り違いを避けるために、“働く”としての ouvrer は敬遠されるようになって、travailler がその後を填めるようになったのである。

ouvrer の同義語として、フランス語はもう一つ別の動詞 labourer を持っていた。labourer は、“耕作機で土地を耕す”という限定された意味とともに、17世紀までは、一般的な“働く”という意味でも使われていたが、travailler が浸透していく過程で、labourer は農作業関係の意味合いに限定されてしまった。

英語には travel の類義語として、trip, journey, voyage などがあるが、このうち journey と voyage はフランス語からの借用語である。フランス語の voyage, voyager “旅、旅をする”に当たることばは、ラテン語の viaticum からきている。⁽¹²⁾ viaticum は via “道”の派生語で、“金銭や食料など、旅の必需品”を意味していたが、時代がくだってガリア地方の俗ラテン語では、“旅程”を意味するようになった。フランス語での初出は、1080年の veiage である。中世においては、この語は特に“巡礼；十字軍”の意味を持っていた。その後 veiage は、veage > voyage (12, 13世紀) > viage > voyage (1480年) と語形変化していくが、15世紀になると、それまでの宗教的意味合いから、より一般的な、“かなり遠い所へ移動すること”という意味を持つようになった。そして15世紀初頭には、名詞 voyage から動詞 voyager が派生した。

英語の voyage は、13～14世紀に古代フランス語から入ったもので、最初は一般的な“旅”を指していたが、中英語以降になると、限定的な“船の旅”という意味が生じた。現代英語の voyage [vɔɪɪdʒ] は、“船または空の旅”のことである。

英語の journey も、古代フランス語 jornee が13世紀の中英語に採り入れられたものである。現代語の jour—journée, an—année の組み合わせからも予想されるように、journée は jour を時間的括りの中で捉えたことばであるが、古代フランス語では“一日の旅程；一日分の仕事”を意味し、この意味とともに英語に借用された。しかし現代英語では、そこに含まれる“一日分の長

さ”という基本の語義は消失して、journey は長期間の陸上の旅を指して使われている。

Ⅲ. blanc と white をめぐって

フランス語の blanc “白；白色の” は、ラテン系の言葉ではなく、ゲルマン語からの借用語である。ゲルマン語 *blank “光る，明かるい” は，ガロ＝ロマン語圏のみならず，ゲルマン民族の侵入とともに，南フランスからイタリア半島を含む広い地域に伝わったとされる。フランス語での初出は，950年頃だという。⁽¹²⁾ *blank は，“光る，明かるい”という語義が示すように，もともとは色彩よりも明暗，光沢のニュアンスを表わすことばであったが，このことばを伝えたゲルマンの兵士たちは，馬の毛色を示す語として使ったらしく，古英語の blanca “白い馬” は同じ語源から出ている。brun “褐色の”，fauve “黄褐色の，鹿毛色の”，gris “灰色の” も，初めは軍馬の毛色としてゲルマン語から借用されたという。フランス語 blanc は，色彩としての“白”を示す以外に，色のつかない，色の薄いという意味で，vin blanc, viande blanche, pain blanc など，有色に対する概念として用いられる。古代フランス語で，武具などの金属を形容する際に使われた，“光る，輝く”という古くからの意味は，現在では armes blanches（近現代では銃火器に対する刃剣類を指すが，古くは，めっきや彫金加工を施してない防御用武器のこと）にその痕跡を留めているにすぎない。

ところでラテン語本来の白を表わす語はどうなったか。ゲルマン人に限らず古代人は，色彩よりも光彩に敏感だったのだろうか，ラテン語には白を表わすことばとして，albus と candidus があった。albus はつやのない，くすんだ白，candidus は輝く，光る白として両者は区別された。albus と candidus は，いずれも色彩語としての語彙をフランス語に残さなかったが，albus は現代フランス語に aube “夜明け”を，candidus は candide “純真な”を与えた。

フランス語以外のロマンス語については，イタリア語の bianco もフランス語同様ゲルマン語から直接入ったとする説が一般的であるが，スペイン語の blanco，ポルトガル語の branco は，フランス語経由の借用語と考えられている。⁽¹²⁾

ここで英語に移ろう。現代英語の white が，ゲルマン祖語 *blank の流れを汲むものではないらしいことは，その語形からも察せられる。white の古形 hwit は，900年前後から確認できるが，1325年頃までに white と綴られるようになった。しかし英語には“白色”を表わす語として，もう一つ別系統の単語 blac があり，古英語時代には広く用いられていた。しかしこの blac は，中英語の時代に徐々に廃れていって，やがて消失してしまう。なぜか。この単語は不幸なことに，現代英語 black “黒；黒い”の古形とまったく同じ綴りだったのである。三輪伸春氏は，13世紀の作者不詳の叙事詩『デンマーク人ハヴロック』における色彩語をテーマにした研究論文の中で，つぎのように述べておられる。⁽¹³⁾

「ME期における blac, blak, blake には形態上の区別がなく，全く同じ形態で，ある場合には“黒い”を意味し，ある場合には“白い”を意味していた。従って，MEの文献で，blac, blak, blake が用いられていたなら，その意味は，その場その場の文脈によらねばならないというのである。」

どうしてこういう結果になったのか，これについても三輪氏は記している。

「ME blac, blak, blake が同じ形態でありながら全く相反する意味を表わすようになったことについては以下のような理由がある。OE期には，blæc, blac “黒い”と blác “白い”は別の単語であり，発音，形態上の一応の区別があったが，互いによく似た形態であった上に，blæc, blac

“黒い”には長音を持った blācian (動詞) という形があって OE 期に既に, blāc “白い” と混同を生じていた。OED によれば, “黒い”を意味する blæc, blac と, “白い”を意味する blāc が共に色の欠如という点で共通し, それが形態上の混乱に拍車をかけた (cf. OED black, 小文字による補足説明) 。

上記のような混乱の結果, 白を意味する二種類のことばのうち, blac, blak, blake 系統は消滅して, hwit > with > white が全面的にその後を継いだのである。blac は, OED が収録している北部方言 blake “白い”に, かすかにその名残りを留めているにすぎない。

ところで現代英語にある, blank “未記入の; 空白の”という単語はどこからきたのか。これはフランス語からの借用語である。白を意味する中英語は, 上記のような複雑な問題を抱えていたのであるが, そうしたなかで1230年頃に, フランス語の blanc も, “白い, 青白い, 無色の”の意味で英語に借用された。その後フランス語の blanc は, 14世紀初頭になると, “文字が書かれていない余白”という語義でも使われるようになった。そしてこの新しい意味が, 14世紀末頃に英語の blank にも伝わったのである。

ここで最後にフランス語 blanc と, 古英語 blac の関係について確かめたい。両者は同じ意味で, フランス語の blanc はゲルマン起源であるから, 同じ単語から派生したと想定してもよさそうであるが, 語形をみると, -an の有無が気になるところである。

古英語 blac へは, 現代英語 bleach “白くする” 経由で行き着くことができる。動詞 bleach < 1200年頃 blechen < 899年頃古英語 blæcan “白くする” < blāc “青白い, 光る”。語源辞典は blāc に到達した段階で, 周辺のことばをも含む, 形容詞 > 動詞の語形変化を紹介している。⁽¹⁴⁾ 古英語 blāc > blæcan, 古高地ドイツ語 bleih > blihhan, 古アイスランド語 bleikr > bleikja など。形容詞から動詞が生まれる過程で, 西ゲルマン系の英語とドイツ語では動詞語尾 -an が付与されるが, 北ゲルマン系のアイスランド語では -a となる点が注目される。

フランス語 blanc についても, その周辺の語彙をみてみよう。blanc の語源とされるゲルマン語 *blank は, 古英語 blanca “白馬”, 古高地ドイツ語 blanc “光る”, 古ノルド語 blakkr “青白い” などからの類推による語形である。*blank について, ロベールの *Dictionnaire Historique de la Langue Française* では, その起源は明らかではないとしながらも, *blank < *blīk-an “光る” のように根底に動詞を想定し, その根拠として, 古サクソン語動詞 blikan, 古ノルド語動詞 blīkja, blikja をあげている。そしてまた, “白い”を表わす語幹 *blīk- は *blaik- のヴァリエントであったとしている。このような経緯を鑑みるに, フランス語の blanc は動詞語尾 -an の影響によるものであり, 根底においては, 古英語の blac と語源を共にするものと考えたい。

IV. frais と fresh をめぐって

フランス語の形容詞 frais は, ゲルマン語からの借用語である。初出は *Chanson de Roland* (1080年) にみられる, freis (男性), fresche (女性) である。フランス語はこれを, 古高地ドイツ語であるフランク語 *frisk “涼しい” から借用した。現代ドイツ語では frisch となる。

英語の fresh について, OED はその語形の変遷を詳しく列挙している。α—11世紀 fersc, 13世紀 fersse, ferchs, 14世紀 fersche; β—13世紀 *Orm.* fresssh, 13~15世紀 fress(e), 13~16世紀 freche, fres(s)ch(e), 14世紀 fraiche, frechs, 14~15世紀 freyssche, 14~16世紀 fres(s)h(e) など。

古い時代の常として, 語形が一定しない状態が続くわけであるが, 一つだけはっきりしているこ

とがある。それは α か β かによって語幹が *fer-* と *fre-* に峻別されることである。13世紀と14世紀には α 、 β が併存しているが、それ以前は α 、それ以降は β に限られる。なぜか。*OED*によれば、「その理由は恐らく、 β 形が古フランス語の *freis*, *fresche* を採り入れた結果」だという。 β 形がフランス語経由のゲルマン語であって、 α 、 β の間に断絶があるとすると、これは先に見た、古英語 *blac* と、現代英語 *blank* に似たケースといえる。シェーラーはこうした問題についてつぎのように解説している。⁽¹⁵⁾

「アングロノルマン語または古フランス語を経て英語に入ってきたゲルマン語の語彙が少なからずあり、多くは古高ドイツ語または古フランク語の語彙である（借用過程は、〔西〕ゲルマン語または古高ドイツ語>〔ロマンス語〕>古フランス語またはアングロノルマン語>中英>近英）。例えば、*fresh*（初出はオーム、1200年）は、古高ドイツ語 *frisc*（<西ゲルマン語 **friskaz*）から古フランス語 *freis*〔男性形〕/*fresche*〔女性形〕（>近代フランス語 *frais*/*fraîche*）を経て中期英語に借用された。古英 *fersc* は「塩を入れない」の意味を持っていたが、それゆえ中英および近英の *fresh* には間接的にしか続いていない。」

シェーラーは、*fresh* の初出が1200年としているが、この時期は、フランス語からの借用語が増加しはじめる境目の時期に当たる。英語 *fresh* は、フランス語 *freis*, *fresche* のうち、後者の女性形を借用したのであろう。語源辞典には、英語 *fresh* と類縁関係にあることばとして、古フリジア語 *fersk*、古代低地ドイツ語および中代オランダ語 *versch*、現代オランダ語 *vers* がみられる。系統上英語に近いこうした語は、いずれも *fer-* をとっている。⁽¹⁶⁾ しかし、中世ネーデルランド語 *frisc*>ネーデルランド（＝フラマン）語 *frisch*>ワロン語（＝ベルギーのフランス語）*frisquet* という経路をたどって現代フランス語になった *frisquet* “うすら寒い” という単語もあり、*fer* と *fri(fre)* 系列は、時代がくだるにしたがって混じり合っていたものと思われる。

日本語になったフレッシュという形容詞は、常にプラスのイメージとして使われるのではなかろうか。フランス語でも、*boisson frais* “冷たい飲み物”、*vent frais* “涼しい風” などにおける *frais* は、プラスの価値判断を伴う。しかし *Un accueil frais* “冷淡な応対” のように、比喩的に使われるある種の表現では、マイナスのニュアンスを帯びることもある。

V. *marcher* と *march* をめぐって

フランス語の *marcher* は普通に“歩く”ことであり、英語の *march* “行進する”に当たるフランス語は、*marcher en file* か、*défiler* になろう。しかしこれら二つの動詞には、字面からして、どこかでつながっているのでは、と思わせるものがある。実際 *marcher* の起源をたどっていくと、ゲルマン語に行き着く。この動詞は古高地ドイツ語 *marcôn* “境界を定める”や、古ノルド語 *marka* “印をつける”（フランス語 *marque*>*marquer* の語源もこの古ノルド語にある）からの類推によるフランク語 **markôn* “（足跡を）しるす”から12世紀に古フランス語に借用された。⁽¹⁷⁾ 当初の意味は、“足跡をつける、足で踏みつける”であったが、13世紀の“～をくまなく歩き廻る（他動詞）”、“～の方へ赴く（*vers*～）”を経て、15世紀には“（軍隊が）行進する；歩く”となり、17世紀になって“（物が継続的に）動く、作動する”も生じた。

英語の *march* は、15世紀の中期フランス語“行進する；歩く”が、*marchen*（1410年頃）の語形で借用されたことに始まる。⁽¹⁸⁾ 祖語のゲルマン語をフランス語経由で採用したわけである。英語のほかには、イタリア語 *marciare* “行進する；歩く”、スペイン語 *marchar* “歩く”、ドイツ語 *marschieren* “行進する”などが、15～16世紀にいずれも軍隊用語としてフランス語から採り入れ

られた。⁽¹⁹⁾

ラテン語の *vadere* “歩く” は、フランス語には全然伝わらなかったのだろうか。そうではなくて、*vadere* は動詞 *aller* “行く” の中にその痕跡を留めている。*aller* の現在形の活用のうち、*v* で始まる語形 *je vais, tu vas, il va, ils vont* は、*vadere* からきているという。⁽²⁰⁾

VI. finir と finish をめぐって

英語の *the end* がフランス語で *la fin* となることは、フランス語を学ばなくとも、映画の最終場面によって知ることが多い。英語の *end* は動詞にもなる。古英語時代に、名詞 *ende* から派生した動詞は、*endian* (950年頃) > *enden* (1200年頃) であったが、現代語では名詞も動詞も同じ形となっている。さらに英語には *end* の類義語として、フランス語から入った *finish* もある。

古典ラテン語 *finire* “境界を設ける；終わる” の流れをくむ動詞は、中世フランス語では *fenir* (1080年)、時に異形として *finer* となっていたが、ラテン語 *finis* “境界；終わり” から派生した単語で、10世紀後半にみられる名詞 *fin* の影響もあって、13世紀になると *finir* と綴られるようになった。この *finir* が1375年頃に、*finischen* として英語に導入された。英語の語尾 *-ischen* > *-ish* は、フランス語 *finir* の複数人称活用語幹 *finiss-* によるもので、同様に、フランス語 *abolir* > 英語 *abolish*, *accomplir* > *accomplish*, *périr* > *perish*, *polir* > *polish*, *punir* > *punish* などが生まれた。

ところで英語の *finish* は、その後再びフランス語に入ってきている。英語をそのまま採り入れたフランス語の *finish* は、日本語同様、今日ではスポーツ用語として“ラストスパート”の意味で使われている。

英語が祖語から引き継いだゲルマン系のことばがありながら、さらにフランス語から同じ意味を表わす語が借用された場合、*faren* と *travel* の例にみられるように、前者が消滅してしまうこともある一方で、*end* と *finish* のように、類義語として両方が生き残っていることも少なくない。その結果現代英語は、ゲルマン語系と、ラテン語を祖とするロマンス語系語彙が融和して、同義語類義語の多い豊かなことばとなっているのであるが、微妙な差異を伴うことが多く、そこが英語の難しさともいえよう。

おわりに

初級フランス語に出てくる基本単語の中から *travail, blanc, frais, marcher, finir* を選んで、類似の英単語との関係を調べてきた。主要英単語2000語のうち、48%がラテン語およびフランス語起源であることを思えば、ことばの系統は異なるとはいえ、英語とフランス語はきわめて強いきずなで結ばれていることになる。そしてそれは、英語とフランス語の相互関係にとどまらず、フランス語がその一部をなすロマンス諸語全体と、英語との関係にもかかわってくる。大量のフランス語が英語に取り入れられた13～16世紀は、ゲルマン語とロマンス語の交流という視点からいっても、画期的な時代だったのである。

〔注〕

- (1) シェーラーは、オランダ語とフランドル語をまとめて低地フランク語としている・シェーラー (1986) p. 26 参照。

- (2) シェーラー 前掲書, pp.63—64.
- (3) ミッテラン (1974) p.22.
- (4) *Dictionnaire Historique de la Langue Française* 参照.
- (5) Gougenheim (1977) Tome I, p.257.
- (6) シェーラー 前掲書, p.90.
- (7) シェーラー 前掲書, pp.95—96.
- (8) *Dictionnaire Historique de la Langue Française* 参照.
- (9) *The Barnhart Concise Dictionary of Etymology* 参照.
- (10) Gougenheim 前掲書, p.202.
- (11) Gougenheim 前掲書, pp.199—200.
- (12) *Dictionnaire Historique de la Langue Française* 参照.
- (13) 三輪伸春 (1995) pp.146—148.
- (14) *The Barnhart Concise Dictionary of Etymology* 参照.
- (15) シェーラー 前掲書, pp.68—69.
- (16) *The Barnhart Concise Dictionary of Etymology* 参照.
- (17) *Dictionnaire Historique de la Langue Française* 参照.
- (18) *The Barnhart Concise Dictionary of Etymology* 参照.
- (19) *Dictionnaire Etymologique de la Langue Française* 参照.
- (20) Gougenheim (1975) Tome III, p.246.

〔参考文献〕

- Gougenheim, G. *Les Mots Français dans l'Histoire et dans la Vie*, Tome I, 2^e éd. (1977); Tome III, 1^{re} éd. (1975), Paris, A. et J. Picard.
- 松浪有編 (1995) 『英語の歴史』, テイクオフ英語学シリーズ1, 南雲堂.
- アンリ・ミッテラン (1974) 『フランス語の語彙』, 内海利朗他訳, 白水社.
- 三輪伸春 (1995) 『英語の語彙史』, 南雲堂.
- マンフレート・シェーラー (1977; 訳1986) 『英語語彙の歴史と構造』, 大泉昭夫訳, 南雲堂.
- Barnhart, R.K. (1988) *The Barnhart Concise Dictionary of Etymology*, New York, Harper-Collins.
- Block, O. et Wartburg, W. (1968) *Dictionnaire Etymologique de la Langue Française*, Paris, Presses Universitaires de Paris.
- Imbs, P. (1971) *Trésor de la Langue Française* 15 vol., Paris, Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Littre, E. (1967) *Dictionnaire de la Langue Française* 7 vol., Paris, Gallimard-Hachette.
- Rey, A. (1992) *Dictionnaire Historique de la Langue Française* 2 vol., Paris, Dictionnaires le Robert.
- Simpson, J.A. and Weiner, E.S.C. (1989) *The Oxford English Dictionary* 20 vol., 2nd Ed., Oxford, Clarendon Press.